

ランボーとブルトン

——« changer la vie »をめくって——

高木 一敏

序

「(人)生を変える」⁽¹⁾。この言葉は、二人の才能豊かな詩人の間を駆け抜けていく。一人はアルチュール・ランボー(1854-1891)、もう一人はアンドレ・ブルトン(1896-1966)である。

1870年から1874年のわずか四年しか詩作をしなかったランボーは、その短い間で詩作に対し独自の思考を展開する。「見者」になることは、ランボーが詩人になるために、自らに下した至上命令であり、また彼を狂気の地獄へ陥れる程の苦悩を課すものだったのである。「(人)生を変える」という彼の言葉は、その苦悩から生み出されたものなのである。

その詩人に魅了されたのが、ブルトンである。シュルレアリスム創始者であるブルトンは、シュルレアリスム発足以前からランボーに情熱を注ぎ、彼を自らの運動の先駆的な存在として位置付ける。もちろん、ブルトンはランボーだけではなく様々な人物の影響を受け、自ら吸収したエッセンスをシュルレアリスムの中に盛り込んでいくのである。

彼ら二人に共通することは、「未知なるもの」を探求することであり、その手段としてランボーは「見者」になろうとし、ブルトンは「シュルレアリスム」を作り出すのである。

ランボーとブルトン、あるいはランボーとシュルレアリスムの関係において、ブルトンがランボーに影響を受け、そしてシュルレアリストたちがランボーの「(人)生を変える」という言葉を好んで使っていたのは、広く知られていることである。ブルトンは、ランボーのどのようなところに魅力を感じ、そして影響を受けたのか。ブルトンはランボーの姿をどのように読み取ったのか。かつ

てランボーがボードレールの真似事をしたように、ブルトンもランボーの真似事をし、彼に追随したのであろうか。

1924年の『シュルレアリスム宣言』の中で、ブルトンはランボーをシュルレアリストとして規定する。それは、「人生の実践その他において」⁽²⁾ということである。ブルトンがそのようにランボーを規定し、そしてランボーはその規定の中でシュルレアリスムに組み込まれていくのである。その詩人の言葉である「(人)生を変える」を、マルクスの「世界を変革する」と共にスローガンとしてシュルレアリスムは使っていくのである。しかし、そこで問題となるのが、厳密な意味でランボーの言葉として使っているのか、ということである。「(人)生を変える」という短く、そして簡単なフレーズは、詩人が狂気に陥るほどの苦悩から生み出されたものであり、全て詩作のために使った言葉である。シュルレアリスムが掲げたスローガンは、それを理解して使っているのか。それとも、孤独な詩人の発した言葉は、大きな流れに飲み込まれ、本来の意味を變形させられてしまい、言葉の響きだけが残り、単なる宣伝文句としてだけに使われたのか。さらに、それは詩人ランボーの存在にも関わってくる問題になる。シュルレアリストとして規定されたランボーは、詩人であり、「見者」であるランボーの全体像なのか。それともブルトンが規定した部分だけが強調され、詩人としての姿を失い、シュルレアリスムに必要な理論だけが残った、ランボーの断片しか存在しないものなのだろうか。

1. ランボーの「人生を変える」

Il a peut-être des secrets pour *changer la vie* ?⁽³⁾

この詩句は1873年に書かれた『地獄の季節』⁽⁴⁾の「錯乱」で書かれたものである。ランボーが「(人)生を変える」という言葉を使った部分である。彼にとって「(人)生を変える」というのは、どのようなことを意味しているのだろうか。また人生を変えなければならない必要性があったのだろうか。

ここで使われている«*la vie*»というのは、詩人ランボーとしての「(人)生」を意味している。それは新たな詩人にならなければならないということである。

これまでの詩の見方、感覚というものを一新すること、つまり詩に関わるあらゆることを変えようとする試み、それが彼にとって「(人)生を変える」ということである。ランボーは変わらなければならなかった。変わる前の「(人)生」は本当の「(人)生」ではない。「錯乱」の中で« La vraie vie est absente. Nous ne sommes pas au monde. »⁽⁵⁾「真の(人)生がないのです。私たちはこの世にいないのです」とも書いている。真の「(人)生」に至るために、それを変えなければならないのである。その変えようとする試みが「見者の手紙」以降の、新しい詩的感覚を求めようとしたものである。

1871年5月15日のポール・ドムニー宛ての手紙が一般的に「見者の手紙」と呼ばれるものである。これは彼の詩に対する態度や論理が展開されている。この手紙は「新しい詩的地平を『発明した』というひそかな確信を十分に物語っている」⁽⁶⁾もので、いわば彼の詩論ともいうべきものであるが、この中で彼は古い形式を批判する。ユゴーについては『レ・ミゼラブル』は真の詩だとしながらも、古いものがありすぎると言い放ち、ミュッセについては最低だと非難する。ボードレーンについては「第一の見者」と賞賛しながらも、形式については「みみっちいものでしかない」と言い切ってしまう。これほどまでに古い形式について非難したランボーが求める新しい形式は、どのようにして獲得することができるのか。それは「見者」になることである。彼の目指す詩人は「見者」なのである。

Le poète se fait voyant par un long, immense et raisonné dérèglement de tous les sens.⁽⁷⁾

これまでの古めかしいものを全て洗いなおさなければならない。詩に関することだけでなく、慣習や道徳観、世界観など全てである。それは自らを狂乱させるほどの危険な試みである。そしてこの壊乱の第一歩とも言うべき探求が、自己の探求である。

La première étude de l'homme qui veut être poète est sa propre connaissance, entière ; il cherche son âme, il l'inspecte, il la tente, l'apprend.⁽⁸⁾

詩人の第一の探求、それは自己認識から始まる。これまで「自己」という存在は、堅固なものとして存在していた。デカルトの「私は考える、ゆえに私はいる」のように、「私」という「自己」は常に絶対的な存在であった。しかしながら、ランボーは、「私」という自己の存在は、それほどまでに強固なものであるのか、絶対的なものであるのか、疑問を投げかける。なぜ今まで当然のように接してきた概念に対して、何の疑いもなく受け入れてしまうのか。全く疑いを持たず、「私」というものを絶対的なものであると信じて書かれた詩、それは「主観的」な詩であって、古めかしいものである。これでは「見者」になることはできない。ゆえに、まず自己認識が必要になってくるのである。その自己認識の要点は、「見者」の名が示す通り、ヴィジョンなのである。

ランボーのヴィジョンは「主観的」なものから「客観的」なものへと移っていく。ジョルジュ・イザンパール宛ての手紙には、私が考えるから、私がいるのではなく、「On me pense.」⁽⁹⁾「誰かが私のことを考える。(だから私がいる)」、と書いているように、始まりの地点が主観ではなく客観になっている。この段階ですでに「感覚を壊乱」しているのではないだろうか。というのは、客観から出発するという感覚は、これまでの規格、規定といったものからはみ出してしまっているからである。多くの場合、人は「主観」を通して対象の情報を分析し、判断する。そして既成概念という枠の中に整理整頓してしまう。それが未知のものであっても、「主観」によって既知の範疇に収められてしまうのである。したがって、ダイレクトに「未知のもの」を受け入れるためには、対象に「主観」ではなく「客観」から向かって行かなければならないのである。

主観から客観というヴィジョンの変遷や、「感覚を壊乱」することを象徴的に表わしているのが、「JE est un autre.」⁽¹⁰⁾「私は他者なのです」という文である。この文章には二つの「壊乱」が存在する。まず一つには、主語が「Je」であるにもかかわらず、動詞の活用が三人称の「est」になっているという、文法的な壊乱。二つ目は「私」と本来なら第三者であるはずの「他者」がイコールとなっている意味的な壊乱。前者はあえて文法を歪め、言葉によって言葉を破壊しようとしている。後者については、ヴィジョンの問題が関わってくる。それは「私」という主観と「他者」という客観をイコールとすることによって、主観と客観の領域を区切ることなく共有しようとしていることである。主観的なヴィジ

ンだけで詩を書くのではなく、詩人であるときには客観が必要になってくるのである。

主観と客観の融合、それがランボーの目指したものである。主観によって感覚を既成概念の枠に収めずに、客観によってよりダイレクトな感覚を求めたからである。それを実践した場所が『後期韻文詩』である。この中で、主観と客観、自己と他者との融合が最も見られる詩句は、1872年5月に書かれた« Fêtes de la patience » 「我慢の祭り」の中の« L'Éternité » 「永遠」の以下の部分である。

Elle est retrouvée.
 Quoi?—L'Éternité.
 C'est la mer allée
 Avec le soleil.⁽¹¹⁾

「太陽と調和する海」という部分が「見者」としてのヴィジョンである。太陽と海、それは火と水であるが、相反する二つの対象物が調和するのである。この関係は、主観と客観、自己と他者という関係にそのまま置換できるであろう。詩人が求めたヴィジョンは、まさにこれである。『後期韻文詩』で「見者」として覚醒するべく様々な試みをすることによって、ランボーにこの光景がもたらされたのである。この光景を見ることによって、彼は「完全なる見者」となることができたのであろうか。『後期韻文詩』の中でそれは達成されなかった。というのは、「見者」になるための試みによって、やっと獲得したこのヴィジョンは、彼の頂点を示すものではなく、「限界」を示すものだったからである。彼の試みはここで挫折する。それに気付くのは、己の「地獄」の中なのである。

『後期韻文詩』での「見者」になるための試みの後、『地獄の季節』の「錯乱言葉の錬金術」で、それについて総括し、検討している。ランボー自身にとつて、その試みはどのようなものであったのか。それは、以下の部分である。

Je réglai la forme et le mouvement de chaque consonne, et, avec des rythmes instinctifs, je me flattai d'inventer un verbe poétique accessible, un jour ou l'autre, à tous les sens.⁽¹²⁾

「あらゆる感覚に近づくことができる詩的言語を創りだす」ために、まずランボーがしたのは、「*J'écrivais des silences, des nuits, je notais l'inexprimable.*」⁽¹³⁾「僕は様々な沈黙を、夜を書いた。表現できぬものを書き留めた。」ということである。「感覚を壊乱」することによって、音のない「沈黙」の中で音を聞きとり、闇に埋もれて見えない夜の中で見ようとし、そして言葉では表現できないものを表現しようとしたのである。それは「あらゆる感覚に近づくことができる詩的言語を創りだす」ことであり、この作品の副題にあるように、まさに「錬金術」である。それを行うためには、今までの概念では不可能である。というのは、これまでの概念では、「沈黙」は音のないものであり、それを表現するには「沈黙」とするしかなく、何も見えない夜の中で何かを見ようとしても、結局は何も見えないのである。そして、言い表せぬもの、例えば「永遠」は、「永遠」と表現する以外にないのである。それをランボーは錬金術にかける。「永遠」を錬金術にかけてランボーのヴィジョンに映ったもの、それが「太陽と調和する海」なのである。

さらに、「錯乱」の中で「永遠」について言及する際、この部分は『後期韻文詩』のそれとは若干異なった表現をしている。「*C'est la mer allée / Avec le soleil.*」という部分が「*C'est la mer mêlée / Au soleil*」⁽¹⁴⁾と表現している。『後期韻文詩』では「調和」というヴィジョンであったのに対して、『地獄の季節』では「混ざり合う」という表現になっている。この表現をすることによって、「太陽」と「海」の境界線がより曖昧なものになっている。なぜなら、「調和」は、互いの境界線をまだ保っている段階であり、釣り合っている関係であるが、「混ざり合う」は、境界線が崩壊してひとつになろうとすることだからである。『地獄の季節』でランボーが見たのは、「太陽」と「海」が混ざり「永遠」ができて上がるヴィジョンなのである。自らの限界を悟り、自ら地獄に落ちなければ、この進化はなかっただろう。二つの表現の差は決して書き間違えたからではない。これは進化なのである。

Aucun des sophismes de la folie, —la folie qu'on enferme, —n'a été oublié par moi : je pourrais les redire tous, je tiens le système.⁽¹⁵⁾

ランボーは自らが作り出した詩的言語について、どれ一つとして忘れておらず、しかもそれを体系として捉えているのである。これほどの自負があるために、あえて表現を変えたのである。「狂気」に陥るほどの試み、それは「感覚を壊乱」しなければならないのである。マルセル・レイモンはランボーを「破壊と反抗の悪魔」⁽¹⁶⁾と形容した。確かに、ランボーはこれまでの概念、道徳、規律といった古めかしいものを破壊し、またそれに反抗した。しかしながら、彼の最終目的は破壊と反抗ではない。新しいもの、未知なるものへ到達するための手段である。ただし、実際に未知なるものへ到達したかどうかは問題ではなく、それに至ろうとすることに彼の重点は置かれていたのではないだろうか。「感覚の壊乱」という破壊的、反抗的行為は、未知なるものに対する構築的模索へ通じるものであり、創造的行為につながるものである。ランボーが詩的創造行為にエネルギーを注いでいるからこそ、「(人)生を変える」という言葉が生じるのではないだろうか。単に日常生活を変えるのではない。彼はあくまで詩人として、詩的言語と向き合い、「見者のヴィジョン」という未知なるものを探求するために、彼自身の文学観、世界観を変革しようとするのである。ランボーの「(人)生を変える」という言葉の真意はここにあるのではないだろうか。

2. ブルトンが見る、ランボーの« changer la vie »

アンドレ・ブルトンがランボーの作品と出会うのは、1914年のことである。当時、ランボーの作品は、いくつかの『後期韻文詩』と『地獄の季節』、そして何篇か未発表だが、『イリュミナシオン』の大部分は発表されていた。だが、現在ほど、ほぼ完全な形で作品が発表されていたわけではなかった。それでも、ブルトンがランボーの作品と出会ったことは彼の最大の関心事となる。ブルトンは『地獄の季節』を読み、すっかり圧倒されてしまう。それは「長々と引き合いに出していた『言葉の錬金術』が出始めた頃に、彼が『倒錯の名作』を見た」⁽¹⁷⁾瞬間であり、ランボーの影響を受ける第一歩である。

シュルレアリスム創始者であるブルトンは、様々な人物に影響を受ける。例えば、ロートレアモンやマラルメなども彼に少なからず影響を与えているだろう。そして、ランボーもまたその一人であり、彼が先駆的存在の一人として見ていたのは間違いないだろう。1915年にルイ・アラゴンに送った手紙には、ブ

ルトンが好む人物の一人としてランボーの名前が書かれおり、1916年には、ランボーのエルネスト・ドラエー宛て書簡（1875年10月14日のもの）が発表され、よりランボーにのめりこんでいく。さらにこの年代には、テオドル・フランケルへの手紙に「絶えず『ランボーの問題』が表されていた」⁽¹⁸⁾であり、「ランボーにありったけの情熱を注ぐ時代であった」⁽¹⁹⁾と、ブルトンは後に証言している。

特にドラエー宛て書簡はブルトンにとって、「ランボーの人生における主要な転機」⁽²⁰⁾を、すなわち詩と訣別し、それ以降は文学と一切手を結ばない人生への移行を明確にしているものである。それはブルトンがランボーの人生を見抜く重要な資料なのである。

ブルトンをこれほどまでに虜にしたランボーの魅力はどこにあったのか。旧式の芸術を批判し、表現できぬものを表現しようとする思考、さらに、それまでの概念を取り払い、自らの主体に疑いをかけるという、「未知なるもの」への探求というのが、ランボーの魅力であったのかもしれない。確かに、全て詩作の為にランボーがそこまで追求したことが、ブルトンを虜にした魅力の一要素となるであろう。しかし、ブルトンにとって一番の魅力は、ランボーの「人生」だったのではないだろうか。というのは、ドラエー宛ての書簡というのが、詩人ランボーから人間ランボーへの転機を示すものであり、ランボーの「人生の本質を見抜く目安となるもの」⁽²¹⁾とブルトンが位置付けているからである。詩人ランボーのみを彼が重視するならば、この書簡よりも、「見者の手紙」や実際に詩作をしていた頃のものに目がいくだろう。だが彼は、このドラエー宛て書簡を最重要視するのである。

この書簡には、「夢」という作品が添えられている。

On a faim dans la chambrée —	兵舎ではみんな腹をすかせている——
C'est vrai...	その通りさ...
Émanations, explosion. Un génie :	飛び散り、爆発。精霊が言う。
« Je suis le gruère ! —	「僕はグリユエールチーズさ！ ——」
Lefèvre: « Keller ! »	ルフェーブルが言う。「ケレル！」
Le Génie: « Je suis le Brie! »	精霊、「僕はブリチーズ！」

Les soldats coupent sur leur pain :	兵士たちはパンを切り、
« C'est la vie !	「これが人生さ！」
Le Génie— « Je suis le Roquefort !	精霊、「僕はロックフォールチーズさ！」
— « Ca s'ra not' mort !...	—「もうすぐ一巻の終わりだろう！」
— Je suis le grüere	—僕はグリユエールチーズさ
Et le Brie... etc.	そしてブリチーズさ...など。
— Valse —	— ワルツ —

On nous a joints, Lefèvre et moi, etc.⁽²²⁾ 僕たちは一緒にされた、ルフェーブルと僕など。

その内容は非常に難解で、詩なのか、それとも詩に見せかけておどけているだけなのか、区別することさえ難しいものである。さらに、この1875年という時期は、すでにランボーが文学を放棄していたと見なされていることも加わって、どのような扱いをすればいいのかすら難しいものである。例えば、イヴ・ボヌフォワは、この時期のランボーについて「無名の実存」⁽²³⁾と表現し、「夢」については「永遠の自己放棄を行うもの」⁽²⁴⁾と評しており、すでに詩人ランボーの姿を見てはいない。文学を放棄した後のランボーの書簡については「詮索しない」⁽²⁵⁾ようにしており、ドラエー宛て書簡を頂点と見なすようなことはない。また鈴木和成氏のように、「詩作品以外のテキストに対して、もう少し敬意を払って慎重な扱いをすべきではないか」⁽²⁶⁾と、慎重な態度を示すものもある。

ブルトンの見方は、「夢」こそが詩人としての頂点であり、ランボーが「人生を変える」ことを実践した瞬間である、というものである。それならばやはり、ブルトンのランボーに対する関心は「見者ランボー」だけではなく、彼の人生そのものとなるだろう。人生に要点を置くがゆえに、1924年の『シュルレアリスム宣言』において「ランボーは人生の実践その他においてシュルリアリストである」という規定がなされたのではないだろうか。しかし、ブルトンは『シュルレアリスム宣言』について語った際、「詩人は見者にならなければならない」というランボーの「見者の原理の株を上げることによって」⁽²⁷⁾結論が出た、という表現をしている。さらに、そのランボーの言葉が彼にとって「神託めいた

もの」であり、「目印となるもの」であった。それはブルトンが「見者ランボー」にも関心を寄せていたことを明確にするものであり、ランボーの詩的活動を理解しているから、「未知なるもの」への到達手段の指針となったのではないだろうか。それを理解していながら、ドムニー宛ての書簡に彼の頂点を見ろというのは、どのような観点からなのだろうか。

その書簡の「夢」を頂点とみなすブルトンの観点には、「沈黙」するランボーの姿があったのではないだろうか。彼は「夢」を最後の詩と読み取り、その後沈黙する詩人の遺書として捉えている。その「沈黙」をランボーが「(人)生を変える」瞬間として、ブルトンが考えているならば、「夢」は、詩人の「頂点」と「沈黙」が同居する作品となるだろう。ボヌフォワが述べた、「子供時代の終わりによって人生を変える希望を失う」⁽²⁸⁾ことによる「沈黙」とは異なったものとなるのではないか。確かに、ランボーがそれほどあっさり文学を放棄するのは、彼らしくない。彼は、自らを地獄に追い込み、「沈黙を、夜を」書こうとし、「言い表せぬもの」を書こうとした詩人である。たとえ沈黙するとしても、ポジティブな理由だと、ブルトンは見ているのだから。もしポジティブな理由があるならば、あえて「沈黙」することによって書かないでいたのではないだろうか。見えないものや言い表せないものまでも見透かしてしまう「見者」の透視力は、すでにエクリチュールを超えてしまったことによって、書いて表現することができない。それゆえ沈黙する。しかし、「見者」としてのヴィジョンは保っているわけであるから、それは詩人の「頂点」であることに何ら問題はない。このような観点からブルトンはランボーを読み取ったゆえに、ヴィジョンがエクリチュールを越えた瞬間を、ランボーが「(人)生を変える」瞬間として捉え、「頂点」と「沈黙」が同居するこの書簡を「本質的な目安」としたのではないだろうか。

しかしながら、ブルトンが「(人)生を変える」という言葉の意味を「沈黙」の瞬間と捉えているならば、本来の「(人)生を変える」という言葉の意味と差異が生まれてくるだろう。ランボー本来の「(人)生を変える」という言葉の意味は、ブルトンが捉えているような、沈黙の瞬間を意味するのであろうか。「夢」の後の沈黙を見越して、『地獄の季節』の段階でこの言葉を使ったのであろうか。その時点で沈黙を前提として詩作をしていたとするのは、難しいだろう。さら

にヴィジョンがエクリチュールを越える、という事態になったならば、それは頂点ではなく、限界点なのではないだろうか。『後期韻文詩』から『地獄の季節』で見せた「永遠」というヴィジョンの進化のように、さらなる進化を求めるだろう。詩人である限り、ヴィジョンとエクリチュールの両方が備わっていなければならない。詩人として不完全な状態だからである。ゆえに、ブルトンが考える瞬間は「頂点」というよりむしろ、「限界点」ではないか。またブルトンが「最後の詩」とする「夢」という作品についても、その内容は兵舎の中でチーズたちが会話するという滑稽なものである。たとえ、ランボーが意図的に滑稽なものを書いたとしても、「見者」としての能力を完全に引き出した究極的な詩とするには、あまりに陳腐なものである。「見者の原理」を理解し、ランボーの言葉に神託めいたものを感じたブルトンにしては、焦点がずれているのではないだろうか。したがって、ブルトンが「夢」に「(人)生を変える」という言葉の意味を見出しているとするならば、そこではすでに本来の意味は変質しているだろう。「夢」に重点がおかれているならば、人生より沈黙やヴィジョンにスポットが当たることになる。したがって、「人生の実践その他においてシュルレアリスト」と、ランボーの人生を持ち出してくるのは無理があるのではないだろうか。もし規定するならば、ジャクリーヌ・シェニウー＝ジャンドロンのように「沈黙においてシュルレアリスト」⁽²⁹⁾とするか、あるいは「ヴィジョンにおいてシュルレアリスト」とする方が適切だろう。

ランボーとブルトンを、詩的、もしくは文学的側面からだけ関係付けようとすると、どうしてもそのような隔たりが発生する。ということは、ブルトンは別の側面からランボーを見ていた可能性がある。その手がかりとなるのは、「夢」である。ブルトンが「夢」を「頂点」と言ったのは、それを「豊かな、勝ち誇った、革命的な、未来的意味を担った」⁽³⁰⁾と考えているからである。先ほど述べたように、「夢」は兵舎の中でチーズたちが語りだすというものであった。それは、ランボーが兵役を嫌っている彼の反抗的精神を見ることができるのである。ブルトンはランボーに文学的側面よりも、労働、兵役の拒否や、反抗的、破壊的精神という社会的側面に価値を見出していたのではないだろうか。ブルトンの言う「人生の実践」とは、ランボーがこのような精神を実践したことを表しているのだろう。

だが、ランボーは実際に反抗運動や革命的運動に参加していた証拠は一切無い。その精神は実際の社会的運動に還元されるのではなく、全て詩作のエネルギーとして使われたのである。『初期詩集』の「パリの軍歌」などには、確かに体制批判をするようなアンガジユマン的性格が見受けられるが、それはあくまで詩の上であって、実際に社会参加していたわけではないのである。しかし、ブルトンにとって実際に社会参加していたかどうかは問題ではなく、要するにそのような精神を持ち合わせていることが重要だったのであろう。

そうすると「人生の実践その他においてシュルリアリスト」という言葉について繋がりが見えてくるが、「(人) 生を変える」という言葉が孤立した存在となってしまう。というのは、ランボーが発した「(人) 生を変える」に社会的側面を持たせることはできないからである。破壊的、反抗的精神を見出すことができたとしても、それはあくまで詩的活動から生まれ、詩的活動に帰結するものだからである。この側面からブルトンが「(人) 生を変える」という言葉を持ち出したとするならば、それはブルトンの革命的精神を表現するキャッチコピーとしての意味しか持たないのである。この場合、本来のその言葉の意味は完全に失われたことになる。

文学的、社会的、いずれの側面から見ても、ランボーの「(人) 生を変える」とは異なったものとなってしまう。さらに、ブルトンが見るランボー像を一連の流れとして解釈しようとする、どこかで途切れてしまう。それはまるでブルトンが自分の都合に合うように、ランボーの断片をピックアップしているかのようなのである。ランボーの詩的活動からはここを、反抗的精神についてはここを、というように。このような現象が起こるのは、ブルトンがランボーを見る時の立場が定まっていないからではないだろうか。その立場とは、個人としてのブルトンと、シュルリアリズムの長としての、つまり集団の代表者としてのブルトンであり、また詩人としてのブルトンと政治的思想を持つブルトンである。二つの顔を持つブルトンに解釈されたランボーはシュルリアリズムの中でどのように展開され、「(人) 生を変える」という言葉は本来の意味とは異なるまま使われたのだろうか。

3. シュルレアリスムの中のランボー

個人としてのブルトンと、集団の長としてのブルトンを厳密に区別するのは非常に困難である。それはブルトン自身がそのことについてはっきりと語ったことがないからである。

1924年の『シュルレアリスム宣言』の段階では、すでに集団の長としての顔を持っているだろう。本来、それは『溶ける魚』の序文として書かれたものであるが、「シュルレアリスムというものを制度化し、体系化するためのテキストではなく、すぐ後にくる『溶ける魚』を正当化するために書かれた」⁽³¹⁾ものである。つまり、自ら行った自動記述（オートマティスム）である『溶ける魚』のためにあるテキストなのである。それゆえ、これはシュルレアリスムという集団によって書かれたものではなく、あくまでブルトン個人で書いたものであるはずだった。しかしながら、「宣言」という言葉を冠したテキストは、その名の通りの位置付けになっていくのではないだろうか。1924年にこれが出版される背景には、約5年に渡る実験活動が存在する。5年前の1919年にはスーポーと共に最初の自動記述である「磁場」の試みがあり、1922年には、デスノス、クルヴェルらと催眠実験に熱中する。そしてこの時期にシュルレアリストグループが形成され始めるのである。そのような活動を中心的支柱として、そして「理論的声明」としてできたのが『シュルレアリスム宣言』である。

アポリネールの発したシュルレアリスムという言葉とは異なる形で、ブルトンはシュルレアリスムを定義し、様々な人物をシュルレアリストとして規定したこのテキストは結局、ブルトン個人のテキストという枠からはみ出してしまっているのではないだろうか。シェニウー＝ジャンドロンは「オートマティスムの理論はブルトンのものだが、その実践は集団的なもの」⁽³²⁾としている。ならば、集団が実践したことをブルトンがまとめた、ということになる。そこではすでにブルトン個人のテキストの領域を越え、集団を代表するテキストとなるのである。また同時に、シュルレアリスム運動を開始することを世間に知らせたものでもある。数日後、シュルレアリスム研究所を設立し、本格的にシュルレアリスム運動が稼動するのである。翌1925年には、トロツキーの『レーニン』を読み、シュルレアリスムと政治の連動を目指そうとする。彼は共産党の文化雑誌『クラルテ』の指導者たちと接触を試み始める。また実現しなかったが、『ク

ラルテ』との融合の機会をうかがい、『内乱』という雑誌を発刊しようと模索していた。27年にはエリュアール、スーポーらと共産党に入党する、など表舞台に立つ機会が増え、政治の色が次第に濃くなっていくのである。それはシュルレアリスムグループを形成し始めた頃からであろう。

彼自身、露出が増えることによって自分のことが全て見られているように感じたのか、1928年の『ナジャ』で「私はガラスの家に住み続けるだろう」⁽³³⁾と書いている。その家は、誰がきたかを見ることができる家であるが、またそれは誰からも見られている家でもある。

人から見られているブルトンは、頑固で自分の理念から外れるものは徹底して排除し、自分に従わないものは除名する、という印象であろう。運動の指導者として絶大な権力をもつブルトンは、時に「シュルレアリスムの法皇」と言われ、そのイメージはステレオタイプとして広がっていき、パブリックな側面が強くなっていくのである。ブルトンが権力を保持すると、彼の活動そのものがシュルレアリスムの活動といっても過言ではなくなる。

そのような状況で、シュルレアリストは個人の責任において、マルクスの「世界を変革する」という言葉と共に、ランボーの「(人)生を変える」を使い出す。ピエール・デックスはこの言葉について「ランボーが残したスローガン」⁽³⁴⁾であると言及している。それはシュルレアリスムという運動を世間に知らしめるために使われただけであり、もはや本来の意味を含まない言葉になっているのである。文学のみならず芸術や、政治的領域においても、この運動の革命的精神を表現するにはうってつけの言葉である。ブルトンが政治への道を切り開き、「(人)生を変える」ことによって真実の生を探ろうとし、マルクスの言葉と並列的に使われることによって、「(人)生を変える」は詩的意味を完全に失っている。それどころか、センセーショナルな響きを持つその言葉には、新たな意味が付与されるのではないだろうか。政治色の強い、革命的精神を持つ言葉として生まれ変わるのである。それはランボーの言葉というより、シュルレアリストたちが作り出した言葉になってしまうだろう。

それではランボー自身の位置はどうなるのであろうか。「(人)生を変える」についてはまったく別な意味を持たされ、シュルレアリスムに言葉を奪われてしまったが、ランボーの存在はシュルレアリスムによって広がっていく。1919

年にブルトンは未発表テキストである「ジャンヌ＝マリーの手」を雑誌『リテラチュール』⁽³⁵⁾に発表し、1924年に「神父服の下の心」⁽³⁶⁾を発売し、アラゴンと共に小冊子にして出版するのである。しかしながら、1924年の「神父服の下の心」については、戦略的な狙いがあったのではないだろうか。それはシュルレアリスムの指導者としてクローデルを糾弾するためのものだったのではないか、ということである。クローデルはランボーをキリスト教的な観点から解釈する。その解釈について、ブルトンはグループの長として糾弾しなければならない。シュルレアリスムに必要なランボー像は敬虔なキリスト教徒の姿ではなく、宗教に反抗する姿なのである。ブルトンは「神父服の下の心」と「帰依」を用いて反撃する。この二つの詩の内容は、前者は神父が同性愛者として描かれ、後者はキリスト教の儀式をパロディ化しているのである。宗教をもてあそぶランボーの姿を見せつけることによって、宗教者ランボーの姿を崩していくのである。確かに、シュルレアリストの立場からすれば、「シュルレアリストたちが絶えず銜学者からランボーを守ろうとする」⁽³⁷⁾行為である。しかし、クローデルを糾弾しておきながら、ブルトンはその解釈に少なからず関心を寄せる。それはシュルレアリスムの指導者としてではなく、彼個人としてである。実際、ボヌフォワもランボーを解釈する際に、ギリシア神話とキリスト教的観念を融合させる見解を示しているが、それには糾弾するどころか、むしろ関心を寄せている。この矛盾はブルトンが、自分自身の個人の部分と公人の部分で揺らいでいるために生まれたものではないのだろうか。

その揺らぎは、ランボー解釈の際にも影響を及ぼしているだろう。「見者の原理」に神託めいたものを感じている頃は、個人としてのブルトンが強く、それを理解している上で「未知なるもの」に到達する手段だと捉えていた。それはランボーに対して詩的、文学的側面からアプローチできたからであろう。しかし、孤独に詩作を続けるランボーと違い、アンガジュマン的志向の強いブルトンは、次第にランボーに対し社会的側面を見るようになるのである。その時、「見者の原理」は「自分達の理論的意図を先駆的に正当化している」⁽³⁸⁾部分だけが照らされているのである。文学的側面と社会的側面、この二つをシュルレアリスム運動開始の時に、どちらを優先させるべきか。それは社会的側面ではないだろうか。運動全体を政治化しようとする指導者は、その運動の広告塔となる

ようなランボーの側面を採用したのである。

それゆえ、シュルレアリスムの中で見えるランボーは、自分達の運動を正当化するものであり、破壊的、反抗的精神を实践しているランボーの姿なのである。シュルレアリスムグループのトップとして、ブルトンは自分達の運動の方向を狂わせるものを、徹底的に排除していかなければならない。それが指導者としての役目であり、義務でもある。そのような状況の中でランボーを解釈すれば、結果として自らに必要な部分だけが残ってしまう、というのは当然のことだろう。ランボーはシュルリアリストではない。彼の全てがシュルレアリスムを正当化するものではないのである。クローデルが宗教的解釈をしたように、シュルレアリスムの流れにそぐわない部分もある。それゆえ、シュルレアリスムの中で見られるランボー像というのは、ブルトンによって解釈されたランボーであり、「人生の実践その他においてシュルリアリストである」ランボーなのである。「(人) 生を変える」という言葉を奪われ、破壊と反抗の精神、革命的精神に富んだランボーとして存在している。見えないものを見る透視力を持った「見者」としてのランボーの存在は、希薄になっているのではないだろうか。ランボーの全体像がシュルレアリスムの中に組み込まれているのではなく、その中にあるのはランボーの断片なのである。

結論

ランボーが発した« changer la vie »という言葉は、想像を絶する苦悩から生まれたものである。単に実生活を変えるという意味で使われているのではない。確かに、この時期のランボー、1873年から74年にかけてのランボーの生活は激動であった。「(人) 生を変える」と口にしたくなるような背景がある。ヴェルレーヌを追ってロンドンに渡りそのまま同棲するが、ブリュッセルで二人の関係は破局を迎える。ランボーはヴェルレーヌに撃たれたのである。退院した後、ロッシュ、パリと住家を転々としている。これは文学をする10代の若者にとってはあまりに辛い出来事であり、詩作に没頭できるような環境ではない。これほどの辛い経験があるならば、一人の人間として「(人) 生を変える」必要があると感じても不思議ではない。しかし、ランボーにとって本当に辛いことは、自らを狂うほどまでに追い込み、新たな詩的言語を作り出すために、言葉と全

面的に向かい合うことである。

それゆえ、彼の「(人) 生を変える」という言葉は、日常生活から生まれたものではなく、全て詩人として言葉やヴィジョンと対峙することから出たものである。その行為は、これまでの思考方法や感覚を再構築し、ものとの関わり方を一新するもので、これまでの人生の延長線上を走るのではなく、「(人) 生を変える」ことによって、あらたなルールの上を走り出すことである。

その詩人に熱を上げるのがブルトンである。彼の解釈は、ランボーの「(人) 生を変える」を変質させたものであり、本来の意味とは異なるものである。それは誤読であったのか、それとも意図的なものなのか。ブルトンほどの才能がありながら誤読、という可能性はほぼ無いに等しいだろう。さらに、アラゴンとランボーについて議論を交わしていたし、ランボーの未発表作品を発見し、それを雑誌に載せるほど情熱を注いでいたのである。なにより、「未知なるもの」を求める指針となったものが「見者の原理」であったことから、詩人ブルトンはランボーの真意を読み取っていたのだろう。だが彼はあえてランボーを社会的側面から解釈したのではないか。もしブルトンが一詩人として生き、シュルレアリスムの指導者とならなかつたら、あのような解釈は出てこないかもしれない。彼がシュルレアリスムのトップであるがゆえに、可能な解釈だったのではないだろうか。解釈というより、抽出という表現の方が、この場合においては適しているだろう。ランボーからシュルレアリスムに必要なエクスだけをブルトンが選別し、シュルレアリスムの中に組み込んでいくのである。その中に必要なのは、「見者の原理」と「夢」に見られる兵役への反抗的精神、そして「神父服の下の心」にある宗教に抗するランボーの姿と「人生を変える」というフレーズである。ランボーを理解した上で、ブルトンはシュルレアリスムに必要な部分を抜き取った結果として、自分たちを正当化するランボーが残ったのである。それゆえ、「人生を変える」という言葉は詩人ランボーの背景を必要としているわけではなく、スローガンとしての役割果たすための言葉として、残っているのである。ランボーが地獄で苦しんだ末に生み出された言葉の姿は、そこにはない。

註

- (1) 『地獄の季節』« UNE SAISON EN ENFER »の中の「錯乱」« Délires »に使われている表現。原文は« changer la vie »。 *ŒUVRES de Rimbaud*, édition de Suzanne Bernard, Classique Garnier 1960.
- (2) 『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』 アンドレ・ブルトン著 巖谷國士訳 岩波文庫 1992年 p.48より引用。Bibliothèque de la Pléiade, *ŒUVRES complètes de André Breton*, édition établie par Marguerite Bonnet, 1988, p.329の和訳。
- (3) *ŒUVRES de Rimbaud*, édition de Suzanne Bernard, Classique Garnier 1960. p.225
- (4) ランボーが自ら出版しようとした唯一の作品。ブリュッセルのポート書店から出版しようとしたが、費用の残金をランボーが支払っていなかったのが、出版されずに倉庫に置かれたままとなっていた。『地獄の季節』が世に出るのは、1886年に« La Vogue » 「ラ・ヴォーグ」に掲載されたときである。
- (5) *ŒUVRES de Rimbaud*, p.224 訳は筆者による。
- (6) 『アルチュール・ランボー伝』 ジャン＝リュック・ステンメッツ著 加藤京二郎・齋藤豊・富田正二・三上典正訳 水声社 1999年 p.117より引用。
- (7) *ŒUVRES de Rimbaud*, p.346
- (8) *Ibid.*, p.346
- (9) *Ibid.*, p.344
- (10) *Ibid.*, p.344
- (11) *Ibid.*, p.160
- (12) *Ibid.*, p.228
- (13) *Ibid.*, p.228
- (14) *Ibid.*, p.232
- (15) *Ibid.*, p.233
- (16) 『ボードレールからシュルレアリスムまで』 マルセル・レイモン著 平井敏照訳 思潮社 1974年 p.38
- (17) Marguerite Bonnet, *André Breton Naissance de l'aventure surréaliste*, librairie José Corti, Paris, 1975. p.68より引用。原文は“Dans le début d'alchimie du verbe qu'il cite longuement, il voit « chef-d'œuvre de la perversité »” 訳は筆者による。
- (18) *André Breton Naissance de l'aventure surréaliste*, p.76 “Il est vrai que « le problème Rimbaud »(...) est sans cesse présent dans les lettres de 1915 et 1916.”を要約して引用。
- (19) 『ブルトン、シュルレアリスムを語る』 アンドレ・ブルトン著 稲田三吉・佐山一訳 思潮社 1994年 p.33
- (20) 『ブルトン、シュルレアリスムを語る』 アンドレ・ブルトン著 稲田三吉・佐山

- 一訳 思潮社 1994年 p.33
- (21) 『ブルトン、シュルレアリスムを語る』 p.33
- (22) Arthur Rimbaud, *ŒUVRES complètes*, édition établie, présentée et annotée par Pierre Brunel, Librairie Générale Française, 1999. p.517- p.518
 訳は筆者によるものだが、一部、『アルチュール・ランボー伝』より引用。1914年の *La Nouvelle Revue Française* に掲載されたのが初出である。この詩の5行目にある、「ルフェーブル」というのは、ランボー夫人が住んでいた家の大家の息子の名前である。ランボーは彼の家庭教師をしていたこともあった。同じく5行目の「ケレール」は、王党派議員の名前で、3年の兵役義務を主張していた人物である。
- (23) 『ランボー』 イヴ・ボヌフォワ著 阿部良雄訳 人文書院 1967年 p.227
 「無名の実存の戻ったものの足跡をつけまわすあの熱心さを私は不謹慎なものに思う」と書いている。
- (24) 『ランボー』 p.221
- (25) 『ランボー』 p.227 「アフリカのランボーが家族に宛てた手紙は読むまい。かつて『火を盗む』事を欲したものが何を打っていた、いや、かにを打っていたなどと詮索しないようにしましょう」と、ランボー沈黙以後の書簡に対してこのような表明をしている。
- (26) 『ランボー、砂漠を行く アフリカ書簡の謎』 鈴村和成著 岩波書店 2000年 p.10より引用。
- (27) 『シュルレアリスムとは何か』 アンドレ・ブルトン著 秋山澄夫訳 思潮社 1994年 p.39
- (28) 『ランボー』 p.219
- (29) 『シュルレアリスム』 ジャクリーヌ・シェニウー＝ジャンドロロン著 星埜守之・鈴木雅雄訳 人文書院 1997年 p.42より引用
- (30) 『シュルレアリスムとは何か』 p.4より引用
- (31) 『アンドレ・ブルトン伝』 アンリ・ペアール著 塚原史・谷昌親訳 思潮社 1997年 p.184
- (32) 『シュルレアリスム』 p.90より引用
- (33) 『ナジャ』 アンドレ・ブルトン著 巖谷國士訳 白水社 1989年 p.12
- (34) Pierre Daix, *La vie quotidienne des Surréalistes 1917-1932*, Hachette, 1993. p.18より引用。
- (35) 1919年3月、アンドレ・ブルトン、ルイ・アラゴン、フィリップ・スーポーの三人で創刊した雑誌。「ジャンヌ＝マリーの手」はブルトンが国立図書館にあったものを写筆し、『リテラチュール』に掲載する形で発表された。
- (36) パテルヌ・ベリション（ランボーの義弟。妹であるイザベルの夫であった。本名

はピエール・デュフル)が写筆して所有していたものを、ブルトンとアラゴンが知り、ベリシヨンの許可を得て、200部ほど小冊子として出版された。

(37) Jean-paul Clébert, *Dictionnaire de Surréalism*, Seuil, 1996. p.520 より引用。「Les surréalistes ne cesseront de défendre Rimbaud contre les cuistres.」の訳。訳は筆者による。

(38) 『アルチュール・ランボー伝』p.117 より引用

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第5号(2004年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html